

神奈川大学人文学会五〇年史に代えて

三五年をむかえて

山 田 操

今年は人文学会の三五周年である。いつのまにか三五年が過ぎ去ってしまった。しかしふり返ってみると、深い感慨をおぼえる。人文学会の生誕と発展の過程は起伏の多かった神奈川大学の歴史とからみあっているし、また個人の研究史とも重なりあっていて、そんなことが人文学会の創生期の頃のあれこれと交錯するからであろう。

創設に立会ったメンバーは草薙正夫（哲学）、信太正三（哲学）、山本新（社会思想史）、藤島昌平（英文学）、飯田耕作（英文学）、福田実（米文学）、長井和雄（教育学）、山田操（社会学）であった。あの頃は皆な若かった。最も年輩だった草薙正夫さんでもまだ五二、三歳であつたはずである。信太、山本、福田さんたちは四十歳前後だったろう。そのいく人かはすでに物故され、いく人かは大学を移られた。いま人文学会に席をおいているのは私だけになった。

最初に学会に参加した人数も一〇人たらずで、少なかった。それだけに皆なが何かを書かねばならなかったし、

報告せねばならなかった。外国語学部が開設され、教員組織が増えるまでは、気がぬけない毎日であった。

考えてみれば、基盤になるような独立した学部組織もないのに人文学会が創られ、《人文研究》が刊行されるようになったのは、全く不思議なことであった。専門学校時代から神奈川大学創生期にかけて、当時としては珍しいことだが、哲学、文学、人文諸学にすぐれた先生たちが多く集っていたことが大きな理由であろうか。専門学校から新制大学への移行に前後して、教員の間にかなりの移動があった。新しくみえた先生たちの参加をえて、近代思想研究会が発足することになった。大熊信行、安井郁、高山岩男、鈴木成高さんなど、資質の異なつた個性的なメンバーが揃つていて面白かつた。この組織が人文学会を創るきつかけとなつた。しかし、この会は研究会や学生を対象とした講演会を二、三度開催しただけで終つた。学内講演会の席上で、講師の大熊先生と《平和》をめぐる問題について論争を交した記憶が私に残っている。

こんななかから、活字で発表する学会誌の実現を目指して二八年人文学会が誕生することになった。当時学内では、法経学部の《商経法論叢》誌しかなく、論文発表の機会がごく限られていたからである。いまと比べて、研究条件が比較にならないほど貧しい状態にあつたわけである。

比較文化、思想の研究を中心テーマとして発足した人文学会は、社会科学としての社会学を目指していた私にとつて、ちよつと場ちがいの感じはいなめなかつた。また学外での仕事も忙しくなっていたが、それはそれで人文学会は愉しい勉強会でもあつた。創設時の中心メンバーは、しいてその系譜を分類すれば、京都大哲、文学の出身者たち、東北大の河野興一、吹田順助さんの系譜、大熊信行さんのグループとなるが、一人で二つの系譜を兼ねる人も何人かいて、学閥意識もなく自由な研究集団であつた。人数の少なかつたことも手伝つて、集まれば各自のやつ

ている研究が話の種になった。

人文学会の創設当時にかかげた課題である〈人文研究〉発行の季刊制への移行は少ばかりおくれたが、共同研究図書としての神奈川叢書の刊行、学生部会の設置はかなり早い時期に完了した。その後、共同研究活動の推進という目標をかかげて人文研究所の設置（三八年）、外国語学部の開設（四〇年）となり、その後長く大学紛争がつづいた。紛争に前後して、人文学会を研究の場として支援していただいた先生たちが大学を去り、また新しくすぐれた先生たちを迎えた。この時期で人文学会の生誕とそれにつづく発展の前段階は終つたのだろう。そしていま人文学会は新しい状況のなかに立っている。

人文研究所は第一期神奈川叢書のあとを受けて、新しく神奈川叢書第一号を出版し始めた（五九年）。外国語研究センターも語学教育、研究の成果を四九年から〈語学研究〉として創刊しはじめた。教職課程委員会でも、現場の卒業生教員をも対象とした独自の機関誌〈心理・教育研究論集〉を発行している。外国語学部の各学科のなかにも、各専門研究の発表の場を求める動きが芽生えている。つまりかつては母体としていた人文学会から、新しく多くの要素が分化をとげ、それぞれの専門化を求める動きとなって現れてきたのである。

他方で、外国語学部の開設、教科内容の充実にともなつて教員組織も大きくなつた。また各教員の研究分野が専門化、多様化してきたことも見逃すことができないだろう。新しい同僚を迎えるたびに、研究分野の全くちがつた新鮮な刺激を受けることができるようになった。この傾向は、おおげさに言えば、少数のかなり同質的な単一集団として出発してきた人文学会が、三五年のあいだに、多数の専門的小集団をかかえる連合体になつてしまったことである。教員の側でのこのような変化とならんで、学生の側でも長い間に性格、意欲、志向など様々の点で大きな

変化があつたはずである。教員の研究を学生の学習活動に結びつける場として学生部会を設定したわけであるが、その活動内容はどのように変つてきているのだろうか。

いずれにしても、人文学会はきわめて分化した専門研究者たちによつて構成される大集団となつた。ここに集積された豊かな研究エネルギーをどのようにしたら開花させることができるのだろうか。人文学会はいま大きな課題をせおっているように思われる。

（『人文研究』第一〇〇集、一九八八年より再録）